

筑波研修いまむかし

縁あって昨年9月から国際耕種に加わり、四半世紀ぶりに JICA 筑波の野菜研修を担当しています。以前に野菜生産コースや南アフリカ野菜特設コースの研修指導をしていたのは、タンザニアでの協力隊の後の1994年から97年までの3年半でした。その後、フィリピン、ケニア、アフガン、南スーダンを巡り、振出しに戻った感もあります。研修を始めてこの四半世紀間で変化した事あれば、相変わらず懐かしく思う事も多くあります。パソコンがまだ目新しく、携帯電話が無かった時代に比べ現在は、途上国のスマートフォンの普及は目をみはるばかりですし、本人の意欲さえあれば様々な情報が容易に獲得でき、学習できます。かつて日本との所得格差が絶対的だった国も現在では格差が縮まってきており、研修滞在時の手当がかつてほどの魅力ではなくなっている国もあります。研修員の学歴も高くなってきました。一方で、英会話能力や道徳観については、あまり変化が見られないように感じられます。

約8か月間、じっくり腰を据えて日々研修員と相対するこの研修は、短期視察型研修や数日から数週間の技術研修に比べ総合的で濃密な内容です。特にこの野菜コースは、JICA の前身である海外技術協力事業団 (OTCA) 時代から50年以上にわたり日本の農業大学校に近い形態で続けられて来た息の長い研修です。課題解決理論に沿ったピンポイント技術の集中的、効率的な研修が求められがちな現在、この JICA 筑波の“伝統的”な農業研修スタイルが相応しいのか否かの議論もありますが、時代に合わせ新たな農業技術を加え、改編しながら現在に至っています。農業大学校が1年で専攻内容を実践的に網羅しているようにここでの研修は、主要野菜の播種から収穫、採種までを網羅し、かつ実験の計画と分析、さらに普

及、経営を加えた内容となっています。また、カリキュラムの6割を占める実験・実習と2割の講義を基本に据えつつも見学・研修旅行に2割を割いており、恵まれた研修内容だと私は思っています。

募集研修員は、普及に係わる中央、地方の中堅職員としていますが、実際の参加者は普及職のみならず研究職、行政職も含まれており多様です。このため研修コンセプトは尊重しつつも、研修員には野菜生産の総合的な知識と技術を習得してもらい、帰国後の職務での確かな判断と決定ができるよう十分な自信と俯瞰できる見識を養成する研修でありたいと考えています。また、技術、知識のみならず長期間の日本生活で体感した日本社会の誠実さ、丁寧さ、気配りの特性から各自の母国の発展へのヒントを掴みとれる機会と指導を心掛けたと考えています。研修員が帰国後、周囲から「日本で長期研修した上司やダイレクターは、見識が豊かで決定バランスが抜群だ。何か違う。」と噂されるようになれば本望です。我々、国際協力に携わる者は、これこそが日本の国際協力のオンリーワンの強みであることを再確認すべきではないかと考える昨今です。(2023年4月 苗代)



野菜コースの実習風景 (左：1995年、右：2023年)